

魔導師は平凡を望む

35



### エルシュオン

ミツキの保護者。親猫扱いされるイルフェナの第二王子。あまりに高い魔力と敵に対する容赦のなさから魔王と呼ばれている。

### シュアンゼ

ガニア国王王子息。現在は国王夫妻の養子で第二王子。ガニア国でのミツキの協力者。ミツキに出会いその本性を見せたことで、「灰色猫」と呼ばれるように。

### 香坂御月

(コウサカ ミツキ)

気がついたら異世界にいたドSな女性。異世界人の魔導師という立場故、問題に遭遇しやすい。周りからは鬼畜魔導師と恐れられる。



### ヴァイス

サロヴァーラの近衛騎士。  
善良で穏やかな性格。  
真面目すぎて視野が狭くなるのが欠点。

### 前男爵夫人

モーリスの義母。元高級娼婦の前男爵夫人。  
男性を手玉にする阿婆擦れと評判だが……？

### モーリス

まだまだ心構えができていない次期男爵家当主。  
その隠しきれない不安や未熟さから頼りない印象を抱かせる。

### マリアベル

モーリスの妹。  
反抗期真っただ中で、前男爵夫人に嫌悪感を感じている。



## 目次

本編 「魔導師は平凡を望む」 35

## プロローグ

——イルフェナ・エルシユオンの執務室にて（エルシユオン視点）

「ミヅキは今頃、何をしているんだろうねえ」

つい零れた言葉に、護衛として傍に控えていたアルとクラウスが私の方を向いた。

そして徐に、顔を見合わせ。

「『お友達』と仲良く遊んでいるではありませんか？」

「そうだな。今回は『仲の良い友人』の所に遊びに行ったのだから」

微妙に暈したことを口にした。

——当たり前だが、建前である。

名目上は二人の言ったことで間違いはない。あくまでも、ミヅキは仲の良い友人の所に遊びに行っただけだ。

まあ、実際には『愚か者を締め上げに行った』というのが正しいだろう。何せ、その発端は我々が入手した情報なのだから。

その『情報』はサロヴァーラ王家にとって、無視できないものである。

しかし、改革が始まったばかりのサロヴァーラ王家に、対処する余裕があるとは限らない。

そうは言っても、イルフェナに属する私達が何の理由もなく他国の内情に関われるはずもない。僭越行為と思われる可能性がある。

その結果、ミヅキにどうするかを委ねたのだ。まあ、何だかんだと仲が良い王女二人が居るので、ミヅキがこの話に乗ってくることは予想できたのだけだ。

当然、手土産として件の情報はミヅキに持たせた。こちらとしても『問題児がお世話になる以上、何かしらの手土産を持たせるべきだと考えた』という言い分が使える上、ミヅキが問題児であることは事実なので、突かれたとしても納得してもらえらるだろう。

もっとも、その『手土産』が原因で、サロヴァーラの某所に災厄が訪れることになりそうだが。

そもそも、良からぬことを企む輩が悪いのだ。その『災厄』はサロヴァーラ王……いや、ティルシア姫次第なので、決してこちらが仕掛けたわけではない。……ないつたら、ない。

ただ——うちの子は出掛けた先で、『別の仲良しのお友達』から招待を受けたらしく。

同じように誘われた、サロヴァーラの公爵子息——彼は貴族というより騎士としてミヅキの護衛を担当することが多いため、ミヅキとも仲が良い——と共に、今度はガニアへと向かったのだ。

……そこまではいい、そこまでは。

この『別の仲良しのお友達』が、中々に癖のある人物なのである。

「うん、サロヴァーラまでは良いんだ。こちらでも承知して、ミツキを送り出したからね」

「おや、ではエルは何を案じているのでしょうか？」

判っているくせに、わざわざ尋ねてくるアル。そんなアルへと、私は達観した表情を向けた。

「ガニアのシュアンゼ殿下が、『ただ仲良しと遊びたいだけ』で招待するとは思えないんだよ

……！ あの方、ミツキから『灰色猫』と呼ばれているからね!？」

少し前にガニアであった『王弟夫妻の失脚・及び断罪』。

ミツキの立ち回り——各国の王達を引き合いに出した、脅迫じみたもの——により、めでたく両親との連座を免れたシュアンゼ殿下は、『一般的な解釈をするならば』、悲劇の王子であろう。

彼は生まれつき足に障碍しょうがいがあり、ミツキがうっかり治してしまうまで、歩くことすらできなかつた。当然、彼が表舞台に立ったことはない。

実の両親から役立たず呼ばわりされ、多くの貴族達からは軽んじられ、挙句の果てには、『血筋的に王太子であるテゼルト殿下の対抗馬になれる』という理由から、一部の国王派の貴族達から命すら狙われていたという。

本人に全く非がないのに、この状況。誰が聞いても、不運などという可愛いものではない。

唯一の救いは、彼が国王夫妻に我が子同然に可愛がられ、王太子であるテゼルト殿下からも実の兄弟のように接してもらったことだろう。

そもそも、高い王位継承権を持つ王族なのに、側仕えが一人だけという有様なのだ。彼への冷遇

ぶりが、嫌でも判つてしまふ。

……が。当のシユアンゼ殿下は、どうやら『悲劇の王子様』が似合う性格ではないらしく。何く故るか、ミヅキと意気投合し、大変やる気に満ちた言動を披露した挙句、見事にミヅキの良き共犯者として立ち回り、王弟夫妻を追い込んでみせたのだった。

間違いなく、彼の変貌の切っ掛けはミヅキ。そして、ミヅキに彼を守れと命じた私である。ガニアに猛獣（意識）を誕生させてしまったのではないかと、少し焦った。

その後、ハーヴィスの一件の際、イルフェナまで来てくれたシユアンゼ殿下と話す機会があったが、ぱっと見、彼は華奢な外見と淡い色彩も相まって、『穏やかな王子様』という印象だった。

まあ、ガニアでの一件もあり、『うちの子をあまり甘やかさないでくれ』と釘は刺したが。ただ、今だから思う……『同類に釘を刺したところで、無駄だったな』と！

ハーヴィスの一件では比較的大人しくしていたようだが、シユアンゼ殿下は嬉々としてミヅキの協力者になつていたような気がするのだ。

そもそも、大人しい王族ならば、未だ、満足に歩けない状態で他国には来ない。

あれは絶対に、己の状況や外見を利用し、『悲劇の王子様』を演じていただけだろう。そこに『恩返しのため、好奇の視線を浴びながらもやって来た』という言葉が付くと、シユアンゼ殿下がとても善人に聞こえる不思議。

しかし、あの時、騎士寮に滞在していた者達は知ったのだ。

『シユアンゼ殿下は間違いなく、ミツキの類似品だ』と。

今回はその『ミツキの類似品』が主導となつて、ある男爵家の次期当主を鍛えるという。同行しているのがミツキやヴァイス殿ということもあり、不安になるのも当然だった。

「シユアンゼ殿下に与えられた『課題』だということは理解できるよ。だけど、その協力者がミツキとヴァイス殿……普通の教育なんて、あの三人にできると思ukai?」

「……」

黙つた。さすがに、アル達でも無理があると悟つたらしい。

「ミツキからの『おねだり』に応えておいて、今更なただけだね。……潰れなければ、大成できる可能性はあるだろう。だけど、それって、『一般的に優秀と言える状態』なのかなって」

「まあ、ミツキからして『愛情深い親猫からのスパルタ教育を施された』と言われていきますからね……」

「シユアンゼ殿下のことは知らんが、ヴァイス殿はまあ……あの国で生き残つてきた方だからな。

サロヴァーラの王家派貴族である以上、通常よりは『色々』厳しいと思うぞ」

「そうなんだよねえ……！ 甘つたれた男爵子息にとつて、とてつもない苦行になつてやしないかと、心配で心配で……！」

ガニアはイルフェナほど実力至上主義ではない。サロヴァーラのように、荒れてもいいない。

そして、彼への教育を主導するシユアンゼ殿下のこれまでの状況は……お世辞にも穏やかとは言えず、細心の注意を払って、王弟夫妻や貴族達を相手に立ちまわっていたはずだ。

つまり、あの三人の『教育』の基準は、世間一般から大きく離れている。

そんな奴らに教育され、彼らの常識を叩き込まれ、男爵家の面々は無事なのだろうか？

「ま、まあ、有能に育つならば、そう悪いことはありませんよ」

「そうだが、エル。ガニアは後々、荒れることが予想されるんだ。今から準備ができて、良かったじゃないか」

「……。そう言う割に、君達が慌てているような気がするのよ気のせいかな？」

「気のせいですよ」

「気のせいだ」

「……」

ジトツとした目を幼馴染達に向けながら、顔も知らないガニアの男爵家の次期当主と、かの家に仕える者達に想いを馳せる。

ここでいくら案じてもしようもないが、ミツキを教育した者として、多少の責任は感じてい  
るのだ。両親からも、『ミツキへの教育は、イルフェナの貴族でさえ吃驚なものだった』（＝遣り過

ぎ」と言われたため、多少は思うところがある。

さすがにあれと同じことが行なわれるとは思わないが、似たようなことをしても止める者が居ないことは確かだった。だからこそ、私だけでも男爵家の面々を案じようと思う。

——どうか、(精神的に)無事で。頑張つて生き延びてくれ。

## 第一話 後妻さんとお茶してみよう

其の一 『後妻さんとミツキちゃん』

——ガニア・ブレイカーズ男爵家のある一室にて

柔らかな午後の陽射しに照らされた室内は明るく、淹いれたたてのお茶の良い香りがカップから立ち上のぼる。そして、テーブルを挟んで向き合うのは——

「ふふ、お誘いいただいて嬉うれしいわ」

「あら、そう言つて貰えるとはね」

私と後妻さんであゝる！

後妻さんがめでたくブレイカーズ男爵家に戻つて来たので、お茶に誘つてみたのだ。

ほら、女同士の会話とかあるしね！ 訳あり者同士だけど、女子会良いよね！

……。

お互い、笑顔ですよ。ええ、お互いにね。

たとえ、<sup>それぞれ</sup>其々が纏<sup>まと</sup>う空気が、ブリザード一步手前だとしても。

身も蓋もない言い方になるけど、シユアンゼ殿下サイドの<sup>メンツ</sup>面子が一番連携を取っておくべきなのが、男爵家の最大戦力たるこの人なんだよね。

モーリス君はまだまだお子様だし、使用人の皆さんも言葉遊びに慣れていない。

唯一、それなりに何でもこなせそうな万能型が家令さんぽいんだけど、彼はブレイカーズ男爵家の使用人達の総括ポジションなので、そちらに集中してもらいたい。

消去法で、私達と本音で遣り取りを行なうのに最適なのが、この後妻さん。

彼女はある程度、モーリス君の成長が見られたら表舞台から退く気満々みたいなので、『ちょっと周囲にバレたらやべえなー！』(意識)という案件だろうとも、心置きなく話せるだろう。

お貴族様は綺麗事だけでやっていける立場ではない。

バレなきやいいんだよ！ バレなければ！

で。

そういったことも含めて、情報の共有をしたいと思っただのです。

シユアンゼ殿下が直接動くのは宜しくないと、他国の高位貴族であるヴァイスも除外。

状況を見る限り、彼女と遣り取りするのは私が適任なのです。元から裏方だしね、私。

「取り繕う気もないし、時間もない。お互い、『素直に』いきましょ」

そう提案すると、後妻さんは軽く驚いたように目を見開いた。

「……私の方がありがたいけれど、貴女はそれで宜しいの？　こちらの都合を押し付けている私が言うのも何ですけど、貴女にとっては弱みになる可能性があるのでは……？」

後妻さんとしては、『他国の人間が、ガニアの問題に勝手に首を突っ込んだ』と解釈され、私やヴァイスの弱みのように扱われる可能性があると言いたいのだろう。

それを弱みとして扱う者には当然、後妻さんも含まれる。彼女の最優先はブレイカーズ男爵家なので、恩知らずと言われようとも、利用することを躊躇うまい。

……が。

それは心配無用というものだ。理由は簡単、そう言われる対象が私（＝魔導師）なのだから。

「今更だし、私ならば突かれても問題ない。だから、私だけが貴女と話しているんだよ」

「え？　い、今更……ですか？　その、シユアンゼ殿下さえ巻き込まなければよい、と？」

「うん。と言うか、私は今まで色々遣り過ぎて、今回のことを咎めるならば、『これまでの依頼主

「達」も咎められなきゃならないからね」

マジです。魔王様經由だろうとも、私にお仕事を依頼してきた人達が居るのは事実。

当時、それが最適と判断されたのは『私が異世界人という特殊な立場にある民間人だから』。

ぶっちゃけますと、私には『国』や『家』といったしがらみ柵がない……そういったものが弱みにならない立ち位置です。

突かれても『異世界人だからよく知りません』という言い分で通ってしまう。寧ろ、それを期待して私にお仕事を回したこともあるだろう。

だから、何も心配はない。

後妻さんが相手だろうと、私にとって弱みにはならないのだから。

……まあ、さすがにそこまで詳しくは語らないけれど。

そこまで言ったら、私が異世界人ということも話さなければならぬので、『今更だから気にすんな☆（＝余計な詮索せんさくは駄目だぞ☆）』でいい。

「……っ」

私が笑顔で圧を掛ける気配を感じ取ったのか、後妻さんが息を飲む。まあ、賢い人みたいだし、その雰囲気気付いているならば、余計なことは言わないだろう。

「さあ、『楽しく』お話ししましょうか」

「……っ、え、ええ、そうね……」

にこやかに告げる私に対し、後妻さんは何となく顔色が悪い。そんな彼女の姿に、私は内心、ほくそ笑む。

——本日の目的、達成かな。

私達は助力する側であっても、主導権は得ていたい。今後のためにも、シユアンゼ殿下の守りには力を入れておくべきだ。

その第一歩が……後妻さんへの『警告』。

昨日の私達の会話を聞かれていなかったとしても、これで彼女には私への警戒心が根付いたはず。

「……過ぎる欲は身を滅ぼすよ。賢く立ち回ってね」

私達は割と貴方<sup>あなた</sup>達が気に入っている。だから、友好的なままでいましょうね？

※※※※※※※※

其の二『自己中外道娘と献身的な後妻』

「早速だけど、突っ込んだ話をしてもいい？」

警告も終わり、呑気にティータイムを楽しむ私と後妻さん。……が、それだけで済むはずはないので、本題を切り出す。

「はい、構いませんわ」

多少は驚いたようだが、そういった話が出ることも予想していたらしく、後妻さんはあっさりとして承してみせた。

彼女としても、私と話すことで得るものがある。それを判っているので、拒否するという選択はないのだろう。賢くて何より。

「貴女から見て、妹さんは魅力的？」

「は？」

「それで彼女の今後が決まると言っても過言ではないから。妹さん自身に価値があるなら、嫁ぎ先……引き取り手は居るでしょ」

とても優秀——単なる『優秀』ではインパクトに欠けるため、特定の分野において才女クラスの評価が望ましい——ならば、それなりに引き取り希望者は居るだろう。

しゅうぶんまみ

醜聞塗れの後妻さんのことがあろうとも、彼女と妹さんに血の繋がりはない。まして妹さんが彼女を嫌悪する姿勢を周囲に見せていたならば、同類のように思われる心配もないだろう。

「厳しいことを言うようだけど、こちらで調べた限り、妹さんには『目を引くような要素がない』。極一般的な令嬢の一人にしか思えない。だけど、その場合、このままならば縁談があるか厳しいと思う。まあ、民間人に嫁いでもいいなら、話は違ってくるけどね」

「……」

はつきり言いたくはないのか、後妻さんは俯うつむいた。ただ、反論をしてこないところを見ると、後妻さんも妹さんの今後を不安に思っていたのかもしれない。

「悪い子ではないと思いますわ。私への反発は当然と言いますか、仕方がないと思いますし。年頃の令嬢という立場から見れば、嫌悪されても仕方がありませんもの」

「……。ふーん」

後妻さんへの反発は当然のものであり、『あくまでも自分が悪い』ということにしたらしい。

ただ、後妻さんは妹さんに反発されまくっているため、それ以外の感想がないことも事実だと思う。話し合いをしていないと言うか、それ以前の問題だろうしね。

それでも、そこはかとなく漂う擁護の気配に、後妻さんは彼女に対して悪く思うことはないのだと推測。

……。

やっぱり、妹さんがお子様だけだったか。

妹さんにこちらの情報を与える気はないが、この分では探りを入れてくる心配もなさげだ。

ならばやっぱり、『どこかの家に養女に出す』という選択が有力だろう。モーリス君達が罪悪感を抱く可能性を考慮すると、それが最良の選択な気がする。

どこか他所よその家に行つて、真偽不明の悪評をばら撒くアホ——その場合、後妻さんだけでなく、ブレイカーズ男爵家も貶おとしめることになるから——なら困るが、後妻さんの話を聞く限り、そういった類たぐひの心配もない気がする。

その可能性があるような子ならば、後妻さんの話に出るはずだ。不安要素と成り得る存在ならば、私達にも伝えておくだろうしね。

「つまり、故意に貶めようとする知恵も悪意もないけど、自分の置かれた状況を理解せず、個人的な感情のままに行動するお馬鹿って感じか」

「お馬鹿……」

「他に言いようがある？ もっと上手うまく立ち回れるような子ならば、私達の仕事の邪魔になる可能性があるし、逆に、そういった面を優秀さと受け取られ、縁談だつてあるかもしれない。だけど、『そんな可能性はない』。情報として知っているだけの私どころか、本人と接している貴女もそう判断した。だったら、その評価で確定じゃない」

後妻さんとして妹さんを悪く言いたくはないのだろうが、アピールポイントもないのだろう。良くも、悪くも、特出した要素がないというか。

もしも『あの子はこんなことが得意なんです！』と言えるようならば、ここぞとばかりに口に出していたはず。

後妻さんも妹さんの今後は気に掛けているようなので、縁談や養子縁組先に伝つ手がありそうな私達に興味を抱かせようとするだろう。それくらいの強したかさはある。

……しかし、現実には厳しいものでして。

妹さんは私に『お馬鹿』と言われて終わった。他に言いようもなかったもので、意地悪ではない。

後妻さんが縫ぬいつて来ないのは、引き際を心得ているからか……最初の警告が活きていて、私を怒らせることは拙ちがいと判断したためだと推測。

「もうすぐ帰って来る彼女次第……ああ、これは今だけでなく、これからの本人の努力とか行動も含むってという意味ね。まあ、ともかく！ それで彼女の今後が決まるでしょう。良い嫁ぎ先を見付けたければ、彼女自身が動くしかないよ」

「……」

後妻さんは悲しげだが、私に同情する気持ちはない。他所の家だって役立たずを押し付けられても困るだけだろうし、シユアンゼ殿下やラフイークさんに縁談の伝手があるとも思えないので、こちらとしてもどうしようもないのだ。

「とりあえず、本人が帰ってきたら話してみるけど……多分、私も嫌われる気がするね」

だって、『世間的には』（重要！）羨うらやましがられる婚約者持ちですからね、私。

守護役だろうと、私達的には戦友同士だろうと、『婚約者』という立場は嘘ではない。……だからこそ、取れる手段というものもあるわけで。

「あまりにも現実が見えていないようなら、『貴族籍の素敵な男性』に来てもらって、正直な感想を告げてもらえば、嫌でも現実が見えるでしょう」

「え」



「だいじょーぶ！　そういった伝手ならあるから！」

後妻さんは顔を引き攣<sup>つ</sup>らせるが、私は割と本気でこの方法が効くのではないかと思っている。

第三者、それも『素敵な男性』（笑）から言われるなんて、令嬢にとつてトラウマになりそうな状況じゃないか。

そこで心をバツキリ折ってもらえば、嫌でも大人しくなるだろう。なに、自分を見つめ直す切っ掛けになるなら、それも良い経験さ。

「あ、あの、あまり酷いことは……」

「……。ふふっ」

「て、手加減を……っ」

そうなのでも私は依頼するだけだから、しーらないっ♪

## 第二話 妹さんの帰宅 其の一

——ブレイカーズ男爵家・客室にて

「マリアベルと申します。歓迎致しますわ」

そう言って微笑んだ彼女の意識がシユアンゼ殿下——ではなく、彼の後ろに控えたヴァイスに向いているのを確認し。

……私はひっそりと溜息を吐いた。同時に、こう思う。

『お馬鹿、決定！』と！

——時は前日に遡る。さかのぼ

モーリス君から『妹が明日、ここに帰って来るんです』と聞いた私達は早速、彼女への対処をどうするか話し合った。

既に単位を取得し、卒業確定のモーリス君と違い、彼女はきっちり授業を受けていたため、帰省するタイミングがずれていたのだけど……私達にとってはそれが良い方向に働いた。

ぶっちゃけると、『モーリス君の覚悟がすでに決まっている』。

これ、重要。モーリス君は何だかんだと妹さんに気にかけているため、『最悪の場合は妹を切り捨てて家を選ぶ』という選択をしない可能性があったから。

彼は両親を亡くしているし、兄として妹を守らなければいけないという気持ちは立派だ。それ自体を否定する気はない。

……が。

妹さんがお馬鹿だった場合、『今のモーリス君』には対処するだけの力がないんだよねえ。

そもそも、当のモーリス君自身、新たな当主として親族から家を守り抜く力がない。

若いということもあるけれど、その覚悟と自覚を持ったのがここ一年ほどなので、圧倒的に準備

不足なのだ。

後妻さんが時間稼ぎをしてくれていたとしても、積極的に行動しなければならなかったのが当主になる予定のモーリス君なので、こればかりはどうにもなるまい。

まあ、モーリス君自身もそれを恥じているようだし、後妻さんにもきちんと詫びたらしいので、それを今更責める気はないんだけど。

だって、どうにもならないし。……マジで、どうにもならないし！（現実）

時間を戻すことはできないのです。『～していたら』なんて希望的観測よりも、『今、何ができるか』に力を注いでもらいたいのですな。

後悔する暇があったら動け、ということですよ。当主になって終わり！ではなく、モーリス君にとつては、そこからが本番なのだから。

当主になれたとしても、漸くスタート地点に立った、というだけだからね？　そこで終わりにして良いのは私達だけですぞ。

で。

そこらへんのこともしっかりと言い聞かせ、家令さん以下使用人の皆さんの意識改革も無事に終

了、その上で後妻さんにも『要らん欲を出すなよ☆』と脅は……いやいや、忠告し。

一通りのことが終わった直後、妹さんが帰って来るといふ報せが来たわけだ。

その報せを聞いた私は思った……『帰って来るのが【今】で良かった』と！

正直なところ、私達のお仕事は八割方終わっている。寧ろ、後は軽くお邪魔虫（意識）を振り払う程度。

元からブレイカーズ男爵家の皆様がやらなければならないことなので、襲撃犯という証人を押さえ、モリス君達の意識改革も済んだ以上、できることは少ないのだよ。

しいて言うなら、襲撃第二弾を警戒するくらいだろうか？ もしくは、『優しい親族』（笑）が接触してきた際に同席するとか。

襲撃はともかく、親族への牽制はシユアンゼ殿下の存在&『ファクル公爵から頼まりました』という言い分で十分なので、マジで私達がしゃばる必要はないだろう。

……しかし、最後に一番の問題点が残っていたわけでした。

それが『後妻さんに反発する妹さん』という存在だ。後妻さんは『反発されても仕方がない』と言っていたけど、正直、それで済ませるには無理があると思う。

妹さんが幼い子ならば、まだ判る。家の状況とか、そういった『自分以外のこと』に思い至らなくとも仕方ないから。

だけど、妹さんは学園に通えるような年齢であつて。

そこそこ情報を得る機会はあるし、友人の家と比較することも可能だ。第一、自分の縁談といった『己の人生に関わること』はそれなりに考えなければ駄目だろう。そういう年頃だ。

それらのことを前提として、シユアンゼ殿下サイドで話し合っている最中なのですよ。

「……これ、私達に会った直後の態度で、彼女がどの程度、この家のことを理解しているか判るんじゃないかな」

「だよねえ」

シユアンゼ殿下の発言に、私も深く頷いておく。他の皆も似たような反応だ。

……別に、『家に帰ったら王子様が居て、驚いた!』という反応を批難する気はない。普通は驚くし、それくらいは見逃そう。

シユアンゼ殿下が言っているのは、それらの驚きが過ぎた後のことだろう。

「即座に対応できるかは別として。……目の前に王子様が居るんだから、探りを入れてくるか、家のことを頼もうとするか……。まあ、どちらかの反応を見せたら、彼女も多少は状況を理解できていると思う」

「教官はその二つの行動ならば、妹さんも見込みがあると思うんですか?」

「うん。現状、家が拙いって判っている上、私達は『モーリス君のことを頼まれてここに居る』。

だったら、彼女にとつても大チャンスじゃない。それくらいの野心を見せてもいいと思う」  
ロイの疑問はもつともだけど、私としてはそれくらいの反応を見せて欲しいところ。

そもそも、私達は『ファクル公爵からの課題』ということと『モーリス君のことを頼まれている』という二点から、『モーリス君が当主になれるよう力を貸す』という解釈になっているだけ。

当然、重要なのは『ファクル公爵からの課題』の方なので、モーリス君が当主に就任してしまえばミッシェンクリア！ なのですよ。

そこに『妹さんの縁談』やら『後妻さんの今後』といったものは含まれていない。

追加オプションなのです。どこまで手を貸すかは私達次第。

「魔導師殿としては、拙くとも、意欲的な姿勢を見せればいい……ということでしょうか」

「ヴァイスには甘いと思われるかもしれないけれど、当のモーリス君も一年前まではお馬鹿さんだったからね。あと、もしかしたら妹さんも自分なりに考えていることがあるかもしれないですよ」

「ああ、ミツキも謎の思考回路とか、考えが読めないって言われるものね」

「そう。だから、『二応』妹さんの考えを聞く必要はあると思う」

シユアンゼ殿下の補足に、ヴァイスは納得したような表情になった。……自分も心当たりがあるのだろう。

ええ、ええ、私は結果を出すことに定評があるけれど、『その過程が意味不明』とも言われてますからねっ！

ルドルフや魔王様にさえ時々言われるので、大抵の人は『お前の頭の中はどうなっているんだ……？』という状態です。

妹さんが私と同じとは思わなければ、彼女は未成年……子供なのですよ。だから、『行動自体は拙くとも、何か考えがあるんじゃないかな？』という可能性もあるわけで。

……。い……一応、ね？ お子様って突拍子もないことをするし、どんなトンデモ案だったとしても、『後妻さんへの反発のみで何も考えていない』というお馬鹿よりはマシじゃないか。

少なくとも、『自分なりに家のことは考えていた』ということにはできる。これがある場合とない場合では、妹さんへの評価が大きく違うだろう。

もしかしたら、後妻さんへの反発を窺<sup>たしな</sup>めようとしたモーリス君の言葉を跳ね除<sup>の</sup>けるだけの根拠——あくまでも妹さんなりの根拠であり、納得させられるだけの説得力があるかは謎——があるかもしれないじゃない！

……。

まあ、期待はしてないけどさ。ただ、会ったこともないのに、お馬鹿と決めつけるのは駄目な気がする。断言できる要素もないしね。

「要は、その妹の心構え次第ってことを言いたいんだろ？ 教官は」

「まあ、そんなところ」

「けどよ、その後はどうするつもりだ？　あの兄貴にさえ反発する子なのに、大人しくこっちの言うことを聞くとは思えねえぞ」

イクスの心配、ごもつとも。しかし、彼は大きな勘違いをしているのだ。

「え？　別に説得する気はないよ？」

「は？」

三人組の声が綺麗にハモる。残りの人達は……私の考えが読めているのか、どこことなく苦笑しているようだ。

「だから、『何も考えていないお馬鹿』かどうかを見極められればいいんだってば。第一、見ず知らずの私達が何を言ったところで、絶対に聞かないでしょ」

「まあ、普通はそうだろうな？」

「だから、一応は意見を聞いてあげる。だけど、それだけ。妹さんにできることって『今は』何も無いんだし、こちらの邪魔をしないように脅す。彼女の出番はモーリス君が当主になった後……所謂、政略結婚くらいじゃない？　それ以外の未来を考えているなら、頑張つて結果を出して見せればいいじゃない」

妹さんが何らかの未来を見据えているなら、卒業前にモーリス君を説得するという方法がある。

それがどこかの家との婚姻なのか、それとも何らかの職業に就くことなのかは判らないが、彼女自身の努力が窺えれば、モーリス君とて無下にはしないだろう。

逆に、未来への展望が全くない場合は、政略結婚の駒として使えるかも怪しい。

今回の私達との接触で妹さんの考えが判るだろうし、それによっておぼろ臆げながら彼女の今後が決まるだろう。

●其の一『何らかの未来を目指し、努力している場合』

←  
とりあえず卒業までは本人の好きにさせる。

●其の二『具体的な案はないが、家のための政略結婚をする気がある場合』

←  
目ぼしい家に当たりをつけ、卒業までに売り込めるだけの能力向上を目指す。

●其の三『後妻さんに反発するだけのお馬鹿だった場合』

←  
貴族籍から外すことも視野に入れつつ、極力、ブレイカーズ男爵家に関わらせない未来を探す。

現時点ではこんな感じ。タイムリミットは卒業までだが、今回は『とりあえず、どうしたいのか』を聞いておければOK。

冷たいようだが、当主が縁談を見繕うことができない——彼女の場合、それが新米当主のモーリ

ス君なので多分、不可能——ので、ほぼこの三択になるだろう。

妹さんに野心があるならば、是非とも『其の二』の案を狙って欲しいものだが、そのためには格上の家から望まれるような子になってもらわねばなるまい。

「じゃあ、とりあえずは様子見だね。私は勿論<sup>もちろん</sup>だけど、ミヅキにも席に着いてもらおうかな。まあ、皆も同じ部屋に居るから、彼女の見極めはできそうだし」

「ああ、同性の私の方が煽<sup>あお</sup>りやすそうだもんね」

口を挟むと、その通りとばかりにシユアンゼ殿下は微笑んだ。

「頼んだ。私は……『足が悪く、影の薄い王子様』ということにしておこうかな」

「自己紹介以外は私が主体になって話せばいいのね。はいな、了解！」

役割を決めて領き合う。妹さんの性格次第で難易度がかなり変わってくるけど、できることならば笑ってさよならしたいものである。

お馬鹿だったなら……現実を突きつけ、心を折るためにも、我が守護役の誰かに登場していただく。

ただ、トラウマになりかねないので、できるならば穩便<sup>おんびん</sup>に済ませたい。

……そう思っていたんだけど、ねえ？

### 第三話 妹さんの帰宅 其の二

目の前の少女——モーリス君の妹さんを、私は秘かに観察した。ちらちらとヴァイスを気にしているのは単に、彼が妹さんの好みの男性……ということだろう。

ただし、その行動が彼女自身をお馬鹿に見せているのは言うまでもない。だって、席に着いているのは私とシユアンゼ殿下であり、ヴァイスはその背後に立っている。

つまり、現在のヴァイスの立ち位置は間違いなく『護衛』。

この家の立て直しに力を貸す人ではない、ということだ。

なお、この配置は私提案の『罨』である。

ラフイークさんは常にシユアンゼ殿下の傍に居る上、服装から見ても、従者ポジションということが誰でも判る。年齢的にも食いつくことはないだろう。

そして三人組では王族の護衛として見られるか怪しいので、高位貴族であり、騎士でもあるヴァイスに『あからさまな護衛ポジション』という立ち位置を取ってもらったのだ。

これならばヴァイスも妹さんと向かい合う形になるので、何かしら気が付くこととかあるかもしれないしね。

が。

妹さんよ……お前、家の立て直しに協力してくれる王子様を前に、その態度はどうよ？

今は好みの男に見惚れる場合ではないし、そんな態度を取って良い場でもない。我らに感謝する姿勢を見せつつも、必死さをアピールして助力を乞う時ですよー？

当たり前だが、ヴァイスは無表情を貫いている。気持的には不快に思っているかもしれないけれど、『妹さんには無関心』というアピールも兼ねて、表情には出していない。

ああ、もう一人の見極め役こと灰色猫はどうしているかって？ こちらはモーリス君達へ『妹さんの意識が他に向いていると気付いているよ！』とアピール……もとい、苦笑中。

可哀想に。(大笑い！)

シユアンゼ殿下のこれまでの言動の数々を覚えているならば、怖くて仕方がない展開だろう。

事実、モーリス君と家令さんは顔を引き曇らせている。それでも口を出さないのは……私達が事前に『お願い』(意識)しているから。

『妹さんがどんな反応をするか見たいの♡』

(訳) 『妹がお馬鹿か見極めるから、邪魔すんな♡』

……こんな感じで、笑顔で脅は……いやいや、お願いしておきました。勿論、事前の暴露もNGです。今後のことを考えるなら、必要なことですからね☆

私達の様子に三人組が後退り（おとすま）してしようと、使用人の皆様が顔色を真っ青にしようと、些細なことなのです……！

第一、妹を野放しにしたのは彼らである。そんな余裕がなかったのかもしれないが、後々、拙いことになるかと判っているなら、最優先で躡（しりぞ）けるべきだろう。

その罪を自覚するためにも暫（しば）し、生きた心地がしない時間を過ごしてもらおうじゃないか。

なお、後妻さんは最初の話し合いが効いたのか、諦めモードで私達の提案に頷いてくれた。そもそも、妹さんは彼女の言うことなど聞かないだろうしね。

私がそんなことを考えている間に、自己紹介を兼ねた一時（ひととき）は始まった。漂う紅茶の香りだけが、平穏さを醸し出している。

「第二王子のシユアンゼだ。ファクル公爵からの『お願い』で、君の兄上が当主となれるよう助力している」

初手は灰色猫。ファクル公爵からの課題を『お願い』と言ったあたり、早々に後妻さんの話題を

出すつもりなのだろう。

ちなみに、これも『毘』である。

言い方は悪いが、現在のブレイカーズ男爵家に公爵家と繋がりがあ、もしくはその伝手があるという人は居ないので、消去法で後妻さんの功績であることが判るだろう。

シユアンゼ殿下の言葉をきちんと聞いて、この家の状況を理解できていれば、後妻さんの悪口めいたことは言えなくなるはずだ。

後妻さんに反発していようと、今現在、私達を繋いでくれたのは後妻さん。

間違っても、貶める内容のことは口にはいけな。

と、言うか。

私達は後妻さんの働きに拍手喝采——私とシユアンゼ殿下だけでなく、ヴァイスも含む——だったので、悪く言われて不快に思わぬはずはない。

私達が認めた人を明確な理由なく貶めるって、私達の価値観を否定することとイコールだから。

後妻さんの行動は『女性は貞淑であるもの』的な考えを持つ人からすれば受け入れられない。それは事実だし、私達とて否定する気はない。

ただし、後妻さんは『阿婆擦れと呼ばれても仕方がない行動』を好んでいるのではなく、『家を守るための手段』として使っている。

だから、彼女は自分の噂を否定しないし、何を言われても言動を変える気はなかったのだろう。だって、意味が全く違うのだから。

貴族である以上、家の存続は最重要案件じゃないか。

見方を変えれば、後妻さんは『体を張って家を守った女傑』だぞ？

個人的な意見を言うなら、王族や貴族は彼女の行動を否定することができないと思っている。物凄く広い目で見た場合、政略結婚なんかもこれに該当しちゃうから。

支援と引き換えに婚姻を結ぶことなんざ、人身売買モドキですよ？ 突かれて困るのはお互い様。……まあ、後妻さんの行動の裏に気付いている人も居るから、彼女の悪評を口にするのは女性が多いのだろうけど。

後妻さんを警戒して、わざと悪意ある噂を振りまいている場合もあるだろうしね。『皆が阿婆擦れを嫌悪している』というのは間違いです。

妹さんはそこに気付いていないのかもしれない。だから、『私だけじゃなく、皆が言っている！』という主張の下、外でも当たり前のように批難していた可能性がある。

妹さんは社交に疎い未成年なので、皆と『その可能性もあるよね？』とは話していたんだ。だから、この場はその思い込みを壊すことも目的の一つだったり。

「私はミツキ。シユアンゼ殿下の個人的な友人だよ」

「私は最近、表に出るようになったばかりだ。だから、心配して同行してくれたんだよ」

ええ、あくまでも私達は友人同士です。国から付けられた護衛とかじゃないぞう。身分や職業なんかも口にしませんよ、そこはモーリス君達と同じ扱ひさ。

「あら……そうですの」

王子様には護衛が付くという認識だったのか、妹さん——マリアベル嬢はやや意外そうな顔になった。

ちらりとヴァイスに視線を走らせたのは、『もしか、この人もシユアンゼ殿下のご友人?』と  
いった心境からだろうか。

……。

そだな、ヴァイスは近衛騎士と思うのが一般的か。

次点で『長男・次男ではない高位貴族令息』だな。

優良物件だけど、男爵家には手が届きそうにない立場……みたいな認識でもしたのだろうか。彼女、先ほどよりも少しだけ気落ちしたように見えますな。

……ただ、人によってはマリアベル嬢の態度——割とバレバレだった——が、『期待外れ』とも受け取れてしまうわけでして。

モーリス君は盛大に顔を引き攣らせた。室内に居る使用人の皆さんも顔色が悪い。女性陣に至っ

ては、卒倒一步手前の人も居るだろう。『王族相手に、何てことを！』と。

そこを更に煽るのが、灰色猫なシユアンゼ殿下。

「おや、期待外れと思わせてしまったかな」

すまないね、と謝罪し、腰が低い様を演出。見た目だけなら『華奢で優しげな、淡い色彩の持ち主』なので、大変、説得力があります。

「い、いえ、そのようなことはっ」

「ああ、それとも……私の友人『達』が気になるのかい？」

「え!? そ、それは……」

慌てて謝罪しようとするマリアベル嬢の言葉を遮さへぎつて、シユアンゼ殿下は私とヴァイスに視線を走らせる。

……。

ああ、釣りですね？ 判ります、釣りを楽しんでるんですね……？

食いつきそうな情報をちらりと流せば、予想通りに動揺した様を見せるマリアベル嬢。しかし、彼女は混ぜられた悪意に気付いていない。シユアンゼ殿下は『友人達』と言ったのだ。

そう、『友人達』。つまり、複数形。そこには当然、私も含まれるわけですよ。ヴァイスのことだけを指しているわけではない。

シユアンゼ殿下によって明確になった、私とヴァイスの立ち位置。彼は『この二人は私にとって友人』と言っているわけです。対等というか、近い立場、みたいな？

そして、マリABEL嬢はヴァイスに好意だか興味を持ち始めている。となれば、ねえ……？

「今、護衛を担ってくれている彼はヴァイスというんだが、ヴァイスはミヅキと『とても』仲が良  
いんだよ」

「え……」

曖昧あやまいな言い方に、マリABEL嬢の視線と興味が私へと向く。

「先日さきも二人だけで遊んでいたよね。狡ずるいよ」

先日のこと〓サロヴァーラでのあれこれ。私が個人的にサロヴァーラへと遊びに行つたし、護衛兼案内役としてヴァイスがずっと一緒に居たので、『超大雑把おおざっぱに考えれば』、その言い方も間違つてはいないだろう。

……ただし、それは恋人達や親しい友人同士が『キャッキャ』と遊ぶようなものではなく。

サロヴァーラのクソ貴族どもを締め上げ、脅し、女狐様に大いに貢献してただけだ。ヴァイスに至っては、お仕事である。

「すみません。お誘いでできれば良かったのですが」

「いや、判っているから気にしなくていいよ。私も君達の邪魔をするほど無粋ぶすいではない」

ヴァイスが謝罪の言葉を口にすれば、更に誤解を招く発言をするシユアンゼ殿下。その瞬間、マリABEL嬢の視線が僅かに鋭くなつた気がした。

……。

煽ってやがるな、灰色猫。

なお、シユアンゼ殿下とヴァイスは別に嘘を言っているわけではない。単に、誤解されるような言い方をしているだけである。

『君達の邪魔をするほど無粋ではない』

←

『サロヴァーラの内部事情もあるし、他国の王族は関わらない方がいいよね。判ってるよ！』

何のことはない、『他国のことだから関われない』というだけである。

ただ、私が大人しくしているとは思っていないため、サロヴァーラ貴族への対処が通常のものとは異なっていること（意識）を、シユアンゼ殿下達は知っている。

だから、『遊んでいた』という表現をしたのだ。まあ、私にとってはそれも間違いではない。

そのことを言っているだけなんだけど、ものの見事にマリアベル嬢は誤解したらしかった。

ちらりとシユアンゼ殿下に視線を向けると、どこか楽しい瞳とかち合った。その目は間違  
いなく『煽れるだけ煽ったよ！ 後、宜しく！』と言っている。

どうやら、シユアンゼ殿下なりに私がやりやすい環境を整えてくれた模様。しかし、それだけではない。切っ掛けは初対面時のマリアベル嬢の態度だろう。

マリアベル嬢は家のことよりも、ヴァイスに興味を示していた。

だからこそ、シユアンゼ殿下は煽ったのだ……『彼女が家のことを最優先に考えられるか』を見極めるために。

興味で終わればいい。だけど、家のこと以外の話題にあっさり乗ってくるようでは困る。

言い方は悪いが、私達はマリアベル嬢を信頼していない。ブレイカーズ男爵家の人々も似たようなもので、彼女に後妻さんの真実は伝えられていないという。

そんな子に対し、私達が説得なんて時間を割くはずはない。必要なのは『感情で物事を考えるか、否か』ということへの見極めだ。

はっきり言つて、これが彼女の分岐点となるだろう。余裕がないブレイカーズ男爵家にとって、不安要素は排除すべきもの。

つまり……この場での遣り取りで、彼女の今後——ブレイカーズ男爵家に残せるか、否か——が決まるのだ。

まあ、折角、シユアンゼ殿下が整えてくれた見極めの場だ。この場での役割もあるし、ありがたい利用するのでしょうか。

「ふふ、いいでしょ。二人で色々楽しんでの」  
とりあえず、余計に誤解させるようにしてみよっかなー!

#### 第四話 妹さんの帰宅 其の三

シユアンゼ殿下の言葉に、マリアベル嬢は僅かに表情を変えた。その年相応とも言える素直さに、私は内心、大笑い!

ですよねー、気になる紹介の仕方をしたものねー!

勿論、わざとである。ここで個人的な感情のままに話題を展開しないならば、まだこの子に救いはあるだろう。

繰り返すが、現在のブレイカーズ男爵家は没落の危機にある。この家の令嬢ならば、家の役に立つべく良縁の一つや二つ、狙ってみるのがベストな対応だ。

第一、シユアンゼ殿下は『君の兄上が当主となれるよう助力している』と言っていたじゃないか。そこを上手く利用し、自分を売り込んで『縁談をお世話してくれたら嬉しいな♡』(意識)と暗に灰めかすくらいはしてもらいたい。

まあ……その『売り込む要素』が全くない場合は話にならないのだけど。

騎士とかを除けば、この家の貴族としての爵位は最下位にあたる『男爵』。その上、家も今後、

どうなるか判らないという不安定さ。

これだけを聞くと、彼女はどう頑張っても優良物件にはならないのよね。少なくとも、他の家が政略結婚をする価値はない。

これはモリス君も同様だけど、彼の場合は当主でもあるため、個人としてそれなりに期待されれば、縁談はあるだろう。

ただし、リアアベル嬢は嫁ぐ側。家の跡取りとか爵位持ちの男性、最低でも職がある人を探さなければ、家のお荷物確定。

そうなると当然、今後を左右するのはリアアベル嬢自身の価値だ。一応、学園に通ってはいるので、出会いが全くないわけではないだろう。

……が。

リアアベル嬢が興味を示したのはヴァイス。このことから、現在の彼女には婚約を考えているような相手がいないと察することができる。

……。

この子、学園を卒業後はどうするつもりだったんだろ？

割と真面目にそう思います。男であっても、家を継ぐ長男とそのスピアである次男以外は家を出るのが当たり前なので、それなりに自分の将来設計を考えるとと思うんだけど。

まあ、いいや。とりあえず煽ってみましようか。

「今回も合流するまではヴァイスと一緒に居たからねえ」

「相変わらず、仲が良いね。あちらの方達の公認だっけ」

「うん、そう」

ヴァイスの正確な素性はまだ伏せておくため、シユアンゼ殿下が『あちらの方達』という曖昧な言い方をする。

サロヴァーラ王家の人達とも受け取れるし、イルフェナの魔王様とも受け取れる言い方なので、嘘は言っていない。

ゆえに、探られても、調べられても、『嘘は吐いていない』となるわけです。相手を引っ掛けるにしても、自己防衛は忘れませんよ！

魔王様達も私にヴァイスが付けられることを察しているため、今回も出がけに『彼も大変なんだから、あまり迷惑をかけるんじゃないよ』というお言葉を貰っている。

サロヴァーラにおける私の御守りと認識されているあたり、やはりヴァイスは微妙に不幸の人と思われている模様。

そんなことを考えつつもリアベル嬢に視線を走らせると、私やヴァイスへの好奇心が抑えきれない様が窺えた。

……いや、一応は隠そうとしていると言うか、冷静であろうとしているのか。

ただ、リアベル嬢は年齢的にも感情を隠して取り繕う経験が少ないのか、上手く隠せていない。

モーリス君達も当然、このことに気付いている。それでもこちらが『余計なことは言うな』と指示を出していたため、何もできないのが現状だった。

抜き打ち検査モドキになっているけど、これはマリアベル嬢の今後にとって重要なこと。どこぞの家に嫁ぐならば、よく知らない相手に感情を見せるのはNGだ。

そもそも、私の周囲にこんな素直な子（意識）は殆ど居ないしね。

ある意味、彼女は成人前に気付いて良かったのか。

ただ、先には後妻さんの強かさというか、賢い面を見てしまうと、どうにもマリアベル嬢は見劣りする。ぶっちゃけると、未熟さが目に付いてしまう。

多少の駆け引きができるような子ならば、煽り続けて様子見……といきたいところだけど、これは直球で煽ってしまった方がいいかもしれない。

「ねえ、マリアベル嬢？」

「は、はい？ 何でしょう？」

「そんなに私達のが気になる？」

「え……っ」

直球で尋ねると、顔を赤らめて視線を彷徨さまよわせるマリアベル嬢。惚とほけることもできず、どう返そうか迷っているようだ。

「ああ、私も悪かったね。プレイカーズ男爵家にとっては大変な時なのに、自己紹介の場とは言え、世間話をしてしまつて」

「い……いいえ、そんなつ」

直球で尋ねることにした私に合わせたのか、シユアンゼ殿下が謝罪する。王子様に謝罪させてしまったことに驚いたのか、益々、余裕がなくなっていくマリアベル嬢。

そんな彼女の姿を微笑ましく眺めつつも、私は『ああ、このままじゃ民間人コースの方が幸せかも?』とか思っていたり。

……民間人なら年相応というか、別に咎められるものじゃないんだよ。生活が困窮していない状況ならば、危機感がなくても普通だし。

未成年ということもあり、特に咎められると言うか、厳しい目で見られることもないだろう。

だが、お貴族様はそうではない。特にプレイカーズ男爵家の事情を知っている人からすれば、危機感がない、で済むはずがない。

後妻さんの行動を批難していたこともまた、そういった評価に拍車をかける。言い方は悪いが、『口だけで、家のために何もしていない』のだから。

さて、そろそろ落ち着いただろうか。私も話に乗ってあげよう。

「そうよね、私達のことなんて貴女に関係ないもの」

微笑んでそう告げる。ええ、事実ですよ。マリアベル嬢と私達の接点なんて、この案件しかないじゃない。

「ああ、でも……貴女もそろそろ婚約とか考えなければならぬよね」

「……っ」

「貴族だもの、家のために良縁を結ぶ努力とかしているでしょう？」

「悪意なんてありません！　と言わんばかりに微笑む私。対して、触れられたくない話題だったのか、マリアベル嬢は唇を噛んで俯いた。

……？

「反論、ねえな？　おい、マジで何の努力もしていなかったりする……？」

「私の縁談は……お兄様が決めると思っています」

「そんな余裕あるように思えないけど？」

「そうだよね……モーリスは家の立て直しと当主としての職務を覚える必要があるから、数年は忙しいだろうしね」

掘り下げると、シユアンゼ殿下が補足とばかりに付け加えた。これにはモーリス君も俯いてしま  
うけれど、今は彼のことを気にしている場合ではない。

「言い難いけれど、君の場合は……いや、君達の場合はすでに先代当主であった父親が亡くなつて  
いる。お父上の築いた交友関係をそのまま続けていられたら、相談に乗ってもらえたかもしれない  
けれど、今の状況では無理だろう」

「え？　学園のお友達は『自分の意思など関係なく決められていた』と言っていましたか……」

「それは家同士の利益を優先した政略結婚か、融資を目的とした婚姻か、親が友人同士といった場

合かな。もしくは欲しい人材だった場合だよ。優秀な人材は確保しておきたいからね」

自分も学園の友人達と同じだと思っていたらしいマリアベル嬢は、シユアンゼ殿下の言葉に顔色を変えた。

やはり、彼女も一年前までのモーリス君同様、自分も友人達と同じだと思っていたらしい。

しかも、シユアンゼ殿下が丁寧に解説しちやつたものだから、改めて家の現状と照らし合わせて、理解できてしまったのだろう。……シユアンゼ殿下の言葉は正しい、と！

「我が家には……口に出すことすら汚<sup>けが</sup>らわしい後妻が居るのです。ですから、我が家と縁を結んでくださる方は居な——」

「関係ないじゃない」

「え……？」

ズバツと否定すると、嫌悪を滲ませながら後妻さんのせいにしていたマリアベル嬢が呆けたような声を出す。

「関係ないじゃない。だって、後妻でしょ？ 血の繋がりなんてないじゃない。しかも、貴女の様子から慕っているようには見えないし、こちらが調べた限り、反発しかしていないでしょう？」

「で、ですがっ、あの人の言動はとても淑女とは言えず、嫌悪すべきものです！ 貴族として相<sup>ふさわ</sup>応しい存在ではありません！」

「血の繋がりがあるなら、『親子は似る』と言われてしまうかもしれない。だけど、貴女達にはそれが無い。仲が良いどころか、反発しかしていない。そもそも、モーリス君が当主になったら、表

舞台から降りる人だよ？」

無理があるのですよ、全てを後妻さんのせいにするのは。

第三者であるお友達からならば、無責任に『貴女も大変ね』とか言つて貰えたかもしれないが、私達は家の立て直しの『協力者』。

マリアベル嬢が後妻さんを『相応しくない存在』と言うならば、私達だつて貴女に『この家に必要な存在』という評価を下す。

「自分は違ふと言うのなら。……貴女の価値は何？ 私達に指摘されるまで、自分が積極的に行動したり、努力したりすることの重要さに気付かなかつたみたいだね？ ねえ、自分の家がこんな状況なのに、何もしない貴女は何なの。貴族は家ありきつて知っているでしょう？ 貴女こそ『貴族に相応しくない』じゃない」

「……っ」

自分の言つた言葉を返され、マリアベル嬢は私を睨みつけた。彼女としては、あくまでも貴族に相応しくないのは後妻さんであつて、自分が言われる側ではないのだろう。

まあ、その気持ちも判る。状況はともかく、部外者の私に指摘されたくはなからうな。

……いや、部外者というだけじゃないか。自分が素敵だと思つた男性と懇意にしている——あくまでも『仲良し』であり、恋人や婚約者といった情報はない——女だからこそ、敵意もひとしお……つて感じかな。

それじゃあ、更に煽つてみよつかない？

「貴女に……言われたくはありません！」

「あら、私は自分の経験に基づいて言っているのだけど」

さらりと返せば、益々マリアアベル嬢は睨み付けてきた。どうやら、私はめでたく彼女の地雷を踏んだ模様。

そして。

私の思惑を理解し、更に悪乗りしてくれるのがシュアンゼ殿下……灰色猫であゝる！

「そうだよね、ミヅキは『必要とされる存在』だし」

「あら、そう言ってくれる？」

「ヴァイスだって、そう思っているさ」

「ええ、勿論です」

まさかのヴァイス、参戦……！

話を振るシュアンゼ殿下もアレだが、即座に乗ってくるヴァイスもなあ……。

どうやら、マリアアベル嬢は徹底的に凹くまさない駄目だと判断した模様。真面目人間だからこそ、厳しい人でもあるのよね、ヴァイス。

そんな裏事情なんて欠片かけらも知らないマリアアベル嬢は、シュアンゼ殿下の誤解を招く発言にあっさりと乗せられたらしく、少し泣きそうな顔でヴァイスを見た。

それでも批難の声を上げないのは、最初に私とヴァイスが仲良しだと明言されたからだろう。  
……。

よし、マリアベル嬢が感情的になりやすいようにしてあげようじゃないか！

「貴族じゃなくとも、必要とされることはあるのよ」

「え!? あ、貴女は貴族ではないのですか!？」

「民間人ですよ」

さあ、どうなるかなー♪

## 第五話 妹さんの帰宅 其の四

私の言葉はマリアベル嬢にとって衝撃的だったらしく、暫し、私をガン見していた。

なお、モーリス君達も驚いてはいたようだが、こちらはマリアベル嬢ほどの驚きはない模様。

理由は簡単、『シユアンゼ殿下がこれまでほぼ、表に出られなかった状態であること』——足が悪いことは本人が暴露済み——と、『私が魔術師と名乗っているから』だ。

あれですよ、シユアンゼ殿下の足の治療で知り合い、お友達になった……と思えるの。

王城勤めの魔術師や、王家が出資している研究所あたりに勤務している魔術師という発想になるのは当然のことながら、個人で研究を続けていた魔術師という可能性もあるじゃない？

モーリス君達はそういったことに思い至っているので、それほど驚かなかったのだろう。マリアベル嬢はお子様なので、『民間人』という単語のみに反応したと思われた。

……シユアンゼ殿下自身、私のことを友人と紹介し、『心配して付いて来てくれた』的な言い方をしたからね。

ヒントは与えられていたわけですよ。私の言動も貴族階級の女性とは思えないだろうし、様々な要素から推測することは可能だったわけですね。

なお、こういったこともモーリス君達の評価対象になっている。

お貴族様は直球ストレートに言わないこともあるし、物凄く暈した言い方をすることも多い。

その言葉を馬鹿正直に受け止めていると馬鹿を見るので、自分である程度の情報収集をしたり、頭を働かせることも重要なのです。

これができないと、今後ちよつと困ることになるので、練習がてら私達の立場を伏せていた。言動から察しろよ、と！

後妻さんあたりならば、私が魔導師と気付く可能性もあるけれど……彼女が難しい立場であることに加え、当の魔導師は王弟夫妻を処刑に追いやった存在。

それを知っていると、王弟夫妻の実子であるシユアンゼ殿下が仲良くしていることに違和感を覚えるだろう。普通に考えれば、魔導師は脅威としてしか見られないからね。

当たり前だが、それらはただの思い込み！

だって、シユアンゼ殿下は被害者であると同時に、『共犯者』だったのだから。

ただ、灰色猫と称されるシユアンゼ殿下の性格を知らないのと、『魔導師と仲良し♪』という状況は有り得ないわけですよ。寧ろ、かたき仇と思っ<sup>て</sup>いても不思議はない。

灰色猫自身、大半の貴族達からの認識は未だ『生まれつき足が悪く、両親から見捨てられたことから国王一家に守られ、ひっそりと暮らしてきた無害な王族』だからね？

正直、『誰のことだよ？』としか思わないけど、シユアンゼ殿下の状況『だけ』を見た場合、それも決して間違いではないんだよねえ……。

しかも、見た目が華奢で優しげ、纏う色彩も淡い色……ということも相まって、前述した思い込みを未だにされているらしい。

……。

多分、まだ行動してないからだろうな、それ。

手駒がほぼ居ない状態からのスタートなので、シユアンゼ殿下は現在、足場固めをしているのだろう。大人しいのではなく、多分、それが原因。というか、それしか思い当たる理由がない。

ファクル公爵からの課題に乗ったのも、それが自分の力や評価に繋がると思解しているからだ。

この王子様は優しげな見た目こそしているが、単なる善意で動いてくれるほど優しくはないのだから。本当に優しいのはテゼルト殿下の方だろう。

そんなことを考えていると、マリアベル嬢は漸く、落ち着いてくれたらしい。私に向けた視線は強いままなので、彼女の興味は薄れていない模様。

「あの……それでは何故、そのようなことを仰いますの？」

「『そのようなこと』って、何？ 正確に言ってくれないと、答えようがないよ？」

「……っ」

ちよろつと意地悪い言い方をすれば、マリアベル嬢が悔しげに唇を噛んだ。どうやら、少しだけ私への警戒意識が上がった模様。

そんな彼女の様子に、私はひっそりとほくそ笑む。少なくとも、いきなり見下してくるお馬鹿ではなかったことが喜ばしい。

お貴族様の中には『民間人』と聞いた途端、見下してくるアホもいる。当たり前だが、『この場では』それは悪手以外の何物でもない。

シユアンゼ殿下は私のことを『友人』と言っている。

これまでの様子からも、親しい間柄だと察することができるだろう。

その王子様の前で『仲良しのお友達』（意識）へと見下し発言なんてすればねえ……？

下手をするとマリアベル嬢個人どころか、ブレイカーズ男爵家へとお叱りの声が飛びますよ。『お前達の教育はどうなっている！』と！

そもそも、側仕えのラフィークさんが私のシユアンゼ殿下への態度を一切、咎めていない。

このことから『このお友達は王家公認』（※現在のシユアンゼ殿下の両親は国王夫妻である）ということが判るだろう。

ラフィークさんの主はシユアンゼ殿下であろうとも、雇い主は今のところ国王夫妻なのだから。

「先ほどの……『貴族ではなくとも、必要とされることはある』という発言についてですわ」

「そのままの意味だけど」

それだけではそうとしか答えようがない。聞くなら『それはどういった場合に起こり得るのですか？』と付け加えるべきだ。

だって、彼女の聞きたいことは『民間人が貴族に必要とされる状況について』でしょ？

当事者である私に聞く以上、私が誤魔化せない聞き方をするべきだ。聞けば欲しい答えが返ってくる……なんて思い込まれても困るじゃないか。

「し……失礼致しました。私はどういった状況下において、貴族や王族が民間人を必要とするのか………ということを伺いたかったのです」

意地悪い受け答えに、どこか悔しそうにしながらも、懸命に言葉を選んでくるマリアベル嬢。そんな彼女に対し、私は微笑んだ。

「そりゃ、沢山あるでしょ」

「え？」

「国が関わっている研究所に勤める民間人、優れた技能を持つ職人、ああ、マリアベル嬢に馴染みがある例で言うなら、ドレスのデザイナーなんかも該当するかな。……貴族階級に在る人達だけでは、貴族の生活なんて成り立たないでしょう？」

事実である。功績を認められて爵位を貰ったりする場合もあるだろうけど、それまでは民間人なのです。

君達の食べ物だって、民間人の皆さんが頑張ってくれているから口にできるじゃない。酒だって、造っているのは労働力として働いている人達だ。

「それは……確かにそう、ですね」

一瞬、ぼかんとした表情になったマリアベル嬢だが、身近な例を出したことで気が付いたのだろう。意外と素直に頷いている。

他には……男爵家の使用人達のことには思い至ったか。貴族としては下位なので、この男爵家の使用人達は『そこそこ教養のある民間人』という人も交じっているに違いない。

「で、貴女の疑問は解消した？」

マリアベル嬢の尋ねたかったことが言葉のままならば、これで十分答えになったはず。本人も納得したしね？

ここでシユアンゼ殿下が会話に割り込んでくれば、マリアベル嬢も納得せざるを得ない。いくら

何でも、王族の言葉を否定することはできないだろうから。

……が。

灰色猫は興味深そうにしているだけで、一向に会話に参加する素振りは見せなかった。と言うか、青い目が楽しげな光を宿している。

なるほど、私に会話をさせてマリABEL嬢を見極める気か。

この程度の理解力では、合格点とは言えないってことですね！

勿論、それに気付いていないのはマリABEL嬢だけだろう。ヴァイスも無言を貫いているので、こちらが尋ねない限り、何らかの動きは見せない気か。

モーリス君達は……こちらの思惑に気付いている分、どこかはららとした様子で見守っている。ただ、先ほどの問い掛けの答えを聞いたマリABEL嬢の素直さには安堵あんどしたようだ。いくら家の状況が見えていなくとも、民間人への見下しはないみたいだし。

……まあ、そんなものが見受けられたら、別の意味で会話は強制終了だが。

『選民意識だけはあるお馬鹿』じゃ救いようがないもん！『民間人に嫁ぐ』という選択肢も消滅し、サクッと見捨てて、終了！ ですよ。

「……」

マリABEL嬢は暫し、迷っているようだった。ここで引くなら、何の傷も受けないだろう。

ただし、これ以上踏み込むならば、私に突かれる可能性を考えなければならぬ。

だって、『私はマリアベル嬢にとって、全くの他人』なのだから。

ほぼ無関係の人のことを根掘り葉掘り聞くのならば、拒絶も、反撃も、覚悟しろってことですよ。いくらヴァイスに興味があっても、マリアベル嬢は私達にとって『他人』。あれこれ聞きたがる人に対し、不審がるのが当然です。

それでも、彼と親しい（※シユアンゼ殿下が意図して言葉を選んだ結果。ヴァイスも国に関わることは暈したので、恋人のように誤解させるには十分）私の立ち位置を知りたいのならば、挑んで来るはず。

さあ、ここが分かれ道。無難に済ませるか、より突っ込んでくるか——

「……ミツキ様はどういった立場の方なのでしょうか」

彼女が選んだのは『会話の続行』。どうやら、好奇心が勝ってしまった模様。

まあ、その気持ちも判らなくはない。私達が用があるのはモーリス君であり、ここに居るのは期間限定。この機を逃せば、次はないのだから。

「ふふ、気になるの」

「ええ。……お二方とは随分と仲が宜しいように見えたもので」

よしよし、会話に応じてあげようじゃないか。まだまだ灰色猫が満足していないしね☆

## 第六話 妹さんの帰宅 其の五

好奇心が勝ったのか、それともこのままでは退けないと思ったのかは判らないが、マリアベル嬢は私との遣り取りの続行を選んできた。

そんな彼女の姿に、私は笑みを浮かべたまま感情を悟らせない。

これは彼女にとって分岐点の一つ。

『会話を終わらせる』ということも選べたのだから。

私と会話を続けることで情報を得ることができるとでも思っているのだろうけど、それは私にも言えること。

事前の情報では『義母を毛嫌いしている』ということと、『家のために特に何かをしているわけではない』という二点だけが、確実なものである。

だから、私達としてもマリアベル嬢との会話は必要だった。彼女が家の状況をどの程度察し、どんなことを考えているか判らなかつたから。

そんな状況の私達からすれば、現在のマリアベル嬢はまさに『カモ』である。

勿論、狩るのは私達。都合よく誘導して、欲しい情報を得させてもらいます」

「シユアンゼ殿下やヴァイスの友人だよ？」

嘘ではありません。私自身の立場なんて、それだけでも十分に証明できる。

これはマジである。魔王様にも『灰色猫やヴァイスと仲良くしてます』（意訳）と自己申告している上、其々が保護者や上司に当たる人達にも告げているから。

『シユアンゼ殿下（王族）とヴァイス（公爵家四男）が、私という異世界人の存在を保証している』とも言い換えられるので、リアベル嬢の立場では疑うことすらできないとも言おう。

……不敬罪があるからね？

シユアンゼ殿下はこの国の第二王子なので、彼が『仲の良い友人です』と言い切ってしまうと、それまでだ。

つまり、この場において本当に適切な自己紹介なわけですよ。

寧ろ、魔導師と言った方が疑いを持たれるだろう。

「それは存じておりますわ！ たった今、お聞きしましたもの」

「じゃあ、それが全てなんじゃない？」

「……っ」

多少の苛立ちを滲ませたリアベル嬢にそう返すと、リアベル嬢は悔しそうにしながらも押し

黙った。

もっと詳しく聞きたいけれど、どう聞いたらいいのか判らない……という感じかな。

私自身がのらりくらりとかわしつつ煽るような言い方をしているので、彼女が苛立つのも当然なのだけだ。

どうくるかなー？ とワクワクしながら待っていると、マリアベル嬢は漸く違う聞き方を思いついたらしい。

「私は民間人が王族や貴族と懇意にしている……という状況が不思議なのです。ミツキ様は魔法を扱われるようですが、職人や医師には見えませんもの。その……失礼ながら、貴女は随分と『若い』ので」

「……」

おい、そこかよ………！

微笑んだまま、硬直すること暫し。ちらりと視線を横に向けると、予想通り、シユアンゼ殿下が笑いを堪えている模様。

なるほど、なるほど、マリアベル嬢は『自分と大して歳が変わらないように見えるのに、年上二人と仲良しって、どういうことだ!?』とも思ったわけですか。

そっかー、身分云々うんぬんということも気になるけれど、見た目の年齢的にも釣り合わないと言いたい

わけですかー。

……。

大きなお世話だ。

悪かったな、童顔で！

……：そーいや、日本人って海外の人達からするとかなり若く見られる人種なんだっけ。だから、商人や職人、医師といった職業に就いているとは思えなかったと。

しかも、シユアンゼ殿下は王子様なので、新人魔術師が仲良くなる機会なんてものもないだろう。王城にはもつと経験豊富で優れた魔術師が勤めているだろうし。

そうなると、高位貴族の学友くらいしか接点になるようなものがない。この家の人達がヴァイスを高位貴族と認識しているのも、それが原因だろうか。

う、うーん……これはマリアベル嬢の困惑も当然か……？ 確かに、民間人として考えた場合、私の立場は想像がつかないかも。

「……ふふっ……勘違いしているようだけど、ミヅキは私達とそう歳が変わらないよ？」

「え!？」

「若く見られるからねえ、ミヅキ。……くくっ」

「シユアンゼ殿下、<sup>うるさ</sup>煩い」

「事実じゃないか」

「黙らっしゃい！」

ピシッ！ と手で突っ込むも、シユアンゼ殿下は肩を震わせている。……まだ笑っているようだ。どうしてくれよう、この灰色猫。

ただ、そんな私達の気安い遣り取り——と言って良いか判らないが、くだらないじゃれ合い——は、マリアベル嬢を納得させる要因になったらしい。

「ほ……本当に仲が宜しいのね」

呆気に取られながら呟くマリアベル嬢。マリアベル嬢ほどではないけれど、モーリス君達も少し驚いたように私達の遣り取りを眺めている。

「ああ、私達が仲が良いのは事実だよ」

「うん、それは本当」

二人揃って肯定すれば、さすがにマリアベル嬢も納得できたらしい。ヴァイスがどことなく柔らかな表情で見守っていたこともまた、彼女を納得させたのだろう。

……この様子だと、彼女は私のことを『王子様と仲が良い魔術師（新人）』とか『元々面識がある側近の関係者』とも思っていたのかもしれない。

今回の同行とて、目立たないよう、そこそこ使える奴をシユアンゼ殿下の護衛に付けた的な位置付けだったかも？

だから余計に、私が『民間人です』と言い出したことが信じられなかったのかもしれないね。王

族と知り合う機会なんて、普通はないもの。

さて、いつまでも馬鹿な話はしてられない。次いこ、次！

「さっき私が言ったのは『職業』という括りでしょ？」

「え？ ええ、そうですね」

「だから、見落としがある。職業という括りならば、シユアンゼ殿下の立場上、熟練の魔術師……もっと年上の人と接することになるでしょう。だけど、それ以外にも親しくなる機会を持つことはできる」

そこで一度言葉を切り、私はマリアベル嬢があまり聞きたくないだろうことを述べた。

「個人として功績を持つ場合、繋がりを求められることが多い。私からではなく、向こうからのアプローチで。何らかの能力を認められた場合や、結果を出した場合が当て嵌まるだろうね。私の場合はこれに該当する」

……もつとも、私達の場合は王弟一派が仕掛けてきたことが、シユアンゼ殿下と親しくなった切っ掛けがな。

ええ、不安定な転移でシユアンゼ殿下の上に落下し、抱き留めてもらいましたよ。その後、うっかり足を治したら捕獲されたけど！

「功績……」

「もつと言うなら、『個人として価値がある』ってこと。貴族同士であっても、身分差がある婚姻もある。それは何らかの旨みがある政略結婚ということも多いけど、『優秀な者を取り込む』という

目的の場合もある」

「……」

何となく言われることを察したのか、マリアベル嬢の顔が強張った。

でも止めない。さあ、君が一番言われたくないことを突き付けてあげようじゃないか？」

「貴女も同じ。家がこんな状況だもの、自分自身の価値を高めて、家の利となる婚姻を目指せばいい。これには貴女が嫌っている後妻さんは関係ないでしょ。さっきも言ったけど、後妻さんとは血が繋がっていないし、貴女自身の価値が問われるのだから」

「……っ」

マリアベル嬢は……自分の婚姻を兄頼みに考えていた。まあ、普通の貴族の家はそんなものだろう。彼女の場合は父親が居ないから、次期当主の兄が……という感じに。

当主が決め、令嬢はそれに従う。反発はあるかもしれないけれど、貴族として生まれ育ってきた以上、家に尽くす義務がある。自由恋愛による婚姻なんて稀まれだろう。

全てを捨てて恋を選ぶ……なんて人も居るかもしれないが、その場合、その後の生活は自分自身に懸かってくる。

貴族として生きてきた者が、いきなりその生活を捨てて生きていけるわけがない。よっぽどお花畑な思考をしていない限り、大人しく政略結婚するだろう。

「貴女にはいる？ 貴女自身を評価してくれる人が」

「……」

「貴女自身の能力や功績を認め、一族に加えたいと望む家がある？」

「……っ」

「今は詳しく言わないけれど、貴女が嫌っている後妻さんはこの家において最大の功労者だよ。だから、それを認めた人が私達へと話を持ってきた」

「そ……そんなこと……」

「貴女が認めないのは勝手だけど、私は事実しか言っていない。今、私達がここに居ることがその証明だね」

マリアベル嬢からの反論はない。というか、反論を思いつかないのだろう。

ブレイカーズ家は所詮、男爵家しよせん。特に重要な役割を持っていることもなければ、特別裕福というわけでもない。しかも現在は当主不在の、吹けば飛ぶような下っ端貴族は。

マリアベル嬢だつて疑問に思つたんじゃないのか……『何故、この家とは無関係のファクル公爵が動いてくれたのか？』つて。

その答えを私は示したのだ。そして今、私は彼女に『貴女には何らかの価値があるか？』と問うている。

「皆が必死になって、家を守ろうとしている。ねえ、貴女は……『何をしてきた』の？」

さあ、答えてもらうよ、マリアベル嬢？ それが私との会話を続けた『代償』であり、後妻さんを批難してきた貴女が示さなければならぬものなのだから。

